

お辞儀を表すオノマトペの移り変わり

— ポクリ・ピョコリからペコリへ —

中 里 理 子

1 本稿の目的

オノマトペは音と意味のつながりを直感的に示す感覚的表現¹とされる一方で、使い続けられたオノマトペは慣用的用法となり、動詞との結びつきが強くなる。たとえば、「雨が激しく降る」様子は「ザーザー」、「見とれる」行為は「うっとり」など、ある状態や行為を表すオノマトペが固定化し、感覚的な側面が薄れ、慣用的表現となる。

現在、「お辞儀をする」行為を表す一般的なオノマトペは、「ペコリ」「ペコペコ」である²。以下に用例を示す。(用例中の下線は筆者。以下同じ)

例1 これも、みなさまのご指導、ご鞭撻のおかげであります。本当に、ありがとうございます。ペコリ。(「茂木健一郎のI love脳」読売新聞2014年10月6日)

例2 携帯電話で話しながらペコペコ頭を下げている。
(「息子のため現役続ける 2013年初場所」朝日新聞2013年1月9日)

例3 ガラス越しにペコペコ謝りながら浅見を通信部まで先導して、それから「浜屋」という小料理屋に案内した。

(内田康夫「孤道 第四章阿武山古墳」毎日新聞2015年3月19日)

例1~3に見るように、現在は頭を下げるオノマトペとして「ペコリ」「ペコペコ」が多く用いられている³。また、「ペコリ」はお辞儀や挨拶の顔文字にも使われており、お辞儀の一般的なオノマトペであると言えよう。

しかし、明治・大正期には以下に見るように、「ペコリ」ではなく「ポクリ」「ポックリ」「ヒョコリ」「ピョコリ」等で表現された例が多数見られる。

例4 友達は嬉しさに笑つて、ぼつくりと頭を下げた。
(水野仙子「四十餘日」明治43年)

例5 お客の顔を見ながらヒョコリとお辞儀をする。
(夢野久作「東京人の墮落時代」大正14年)

例6 周平はびよこりとお辞儀をした。(豊島与志雄「反抗」大正10年)

例7 その通りです、と久助がびよこんと頭を下げた。
(池谷信三郎「忠僕」大正15年)

本稿では、お辞儀を表すオノマトペが明治から昭和中期にかけてどのように移り変わってきたかを明らかにする。オノマトペと動詞に強い結びつきがあるように見えて

も、時代によってその結びつきが変わっていくことを確認し、オノマトベにおける〈音と意味の結びつき〉について考える一資料とする。

調査にはインターネット図書館「青空文庫」を利用し、明治から昭和20年代の用例を収集した⁴。青空文庫に掲載されている作品には多少の偏りがあり、特に明治期は他に多くの作品を調査する必要があるだろう。広く調査を行った場合、ここで取り上げる語形以外の語形が出現し、語数の割合にも違いが現れる可能性があるが、ここでは調査範囲で得られたものについての傾向をまとめる。

2 明治～昭和20年代のお辞儀を表すオノマトベ

青空文庫で「お辞儀」「頭を下げ」「腰を曲げ」等の語句で検索した結果⁵、お辞儀を表すオノマトベが何種類も見られた。これらを語基の面で整理すると、〈ポク〉系統、〈ヒョコ〉系統、〈ピョコ〉系統、〈ペコ〉系統に分けられる。また、これらのオノマトベの語形を見ると、〔A Bリ〕〔A ッBリ〕〔A Bン〕〔A Bッ〕〔A B A B〕という語形式に分けられる。

本稿で取り上げるオノマトベについて、語基と語形の関係がわかるように以下に整理した。用例の表記はひらがな・カタカナの両様が見られたが、本文中はカタカナ表記に統一する。数字は今回の調査で抽出した用例数である。なお、他に「ピコリ」1例、「コックリ」2例、「コクリコクリ」1例が見られたが、用例数が少ないため、ここでは取り上げない。

〔表1 明治から昭和20年代のお辞儀を表すオノマトベ〕

	〔A Bリ〕	〔A ッBリ〕	〔A Bン〕	〔A Bッ〕	〔A B A B〕
<ポク>	ポクリ4	ポックリ8	－	－	－
<ヒョコ>	ヒョコリ8	ヒョッコリ2	ヒョコン1	－	ヒョコヒョコ12
<ピョコ>	ピョコリ22	ピョッコリ1	ピョコン27	ピョコッ1	ピョコピョコ25
<ペコ>	ペコリ33	－	ペコン12	－	ペコペコ69

表1に見るように、調査範囲において全ての語形が見られたのは〈ピョコ〉系統であった。現在の「ペコリ」「ペコペコ」が一般的になるまでには、「ピョコリ」「ピョコン」「ピョコピョコ」が広く用いられていたと考えられる。〈ポク〉系統は「ポクリ」「ポックリ」だけに用例数が示してあるが、他の語形式のオノマトベ（「ポクポク」「ポクン」）は存在しており、何かを叩く音など擬音語として使われている⁶。

次に、時代による移り変わりを見るために、調査対象とするオノマトベについて、〈ポク〉系統、〈ヒョコ〉系統、〈ピョコ〉系統、〈ペコ〉系統の順に並べ、大まかな年代ごとの用例数を整理した。

〔表2 お辞儀を表すオノマトベの年代別用例数〕

	明治	大1~8	9~15	昭2~7	9~15	16~22	23~29
ポクリ	—	1	2	1	—	—	—
ポックリ	2	3	—	1	—	1	—
ヒヨコリ	1	—	2	1	2	1	1
ヒヨッコリ	—	1	1	—	—	—	—
ヒヨコン	—	1	—	—	—	—	—
ヒヨコヒヨコ	2	2	2	3	2	—	1
ピヨコリ	1	1	6	4	6	2	1
ピヨッコリ	—	—	1	—	—	—	—
ピヨコン	—	—	2	2	13	10	—
ピヨコッ	—	—	1	—	—	—	—
ピヨコピヨコ	2	1	6	9	3	2	2
ペコリ	—	—	1	6	11	5	10
ペコン	—	—	1	1	4	4	1
ペコペコ	3	3	5	12	32	8	6

*1926年は12月26日から昭和元年になるため、大正15年として扱った。

表1及び表2にまとめた用例の出現状況から、次のことが推測される。

- ① 明治期には「ポクリ」「ポックリ」「ヒヨコリ」「ピヨコリ」が主に使われており、「ペコリ」はほとんど使われていなかった。
- ② 「ポクリ」「ポックリ」はお辞儀を一度する様子を表しているが、お辞儀を何度もする様子を表す場合、「ポクポク」を使わず、「ヒヨコヒヨコ」「ピヨコピヨコ」「ペコペコ」で表していた。
- ③ 「ポクリ」「ポックリ」は昭和初期まで用例が見られるが、その後はほとんど使われていない。
- ④ 用例数から見ると、「ヒヨコリ」「ヒヨコヒヨコ」など〈ヒヨコ〉系統より「ピヨコリ」「ピヨコン」「ピヨコピヨコ」など〈ピヨコ〉系統のほうが多く使われていた。
- ⑤ 「ピヨコリ」「ピヨコン」「ピヨコピヨコ」は昭和20年ごろまで多く使われていた。
- ⑥ 「ペコリ」「ペコン」は大正後半から用例が見られる。
- ⑦ 「ペコペコ」は明治から用例が見られるが、用例数が増えるのは昭和になってからである。昭和以降は「ヒヨコヒヨコ」「ピヨコピヨコ」より用例数が多い。

以下、「ペコリ」「ペコン」など《1回のお辞儀を表すオノマトベ》と「ペコペコ」など《お辞儀を繰り返す様子を表すオノマトベ》に分け、用例とともに上記の推測について確認していく。さらに、それぞれのオノマトベが持つ他の語義と関連させながら、お辞儀を表すオノマトベの移り変わりについて、考えられる原因を検討する。用例の年号には数字で示し、明治はM、大正はT、昭和はSの略号で表す。

3 1回のお辞儀を表すオノマトベ

3.1 〈ボク〉系統

まず、〈ボク〉系統の「ボクリ」「ポックリ」の用例を見てみよう。(／は改行を示す。)

例8 火鉢の前にいるいしを認めると、ろくは、ぼくりと上体をまげて礼をし、そこに突立った。
(宮本百合子「小村淡彩」T15)

例9 「は。」／気が付いたやうに彼はぼくりと頭を一つ下げた。
(水野仙子「嘘をつく日」S7)

例10 大げさに一つぼっくりと礼をばするや否や、飛石に蹴躓きながら駈け出してわが家に帰り、帰ったと言女房にも云わず、いきなりに雛形持ち出して人を頼み、
(幸田露伴「五重塔」M24~25)

例11 彼は合唱した手を疊について、ぼっくりと恭しくお辞儀をしてから座に戻って来た。
(水野仙子「酔ひたる商人」T8)

例12 ぼっくりと一人白い軽い外套を羽織った女がその海岸通の並木路の日蔭の間に立って片手を高くあげながらむこうを通ってゆく汽船に挨拶を送っている。
(宮本百合子「ヴォルフの世界」S16)

「ボクリ」「ポックリ」は、先の表2に見るように、調査範囲では明治から昭和初年まで用例が見られた。例9のように単に「頭を下げる」様子にも用いられるが、例8の「上体をまげて礼をする」、例10の「大げさに礼をする」、例11の「恭しくお辞儀をする」、例12の「(遠くの汽船に)挨拶を送る」のように、体を大きく曲げたり比較的ゆっくりお辞儀や挨拶をしたりする様子を表していたことが窺える。

「ボクリ」「ポックリ」と共起した語句を見ると以下ようになる。

ボクリ：頭を下げる3 礼をする1

ポックリ：頭を下げる3 礼をする1 お辞儀する1 挨拶を送る1 首を曲げる1

「ボクリ」「ポックリ」は、お辞儀をする様子を表す以外にもいくつかの意味をもつ多義語⁷であるが、その中に次のような「折れ曲がる」意味の用例がある。

例13 馴たものは根の上からボクリと折り取るようにして根の先の土を動かさずにおきますからまた雨が降ると幾度でも出て幾度でも採れます。
(村井弦斎「食道楽 冬の巻」M36~37)

例14 この鳥居は後で見たら、中央からポックリと両つに折れていました。
(高村光雲「幕末維新懐古談 猛火の中の私たち」T11~12)

例13、14を考えあわせると、「ボクリ」「ポックリ」は何か折れ曲がる様子をイメージさせるオノマトベであり、お辞儀に使われる場合には、首を大きく曲げて頭を下げるお辞儀、あるいは、腰を大きく曲げて丁寧に行うお辞儀を表していたのではないかと推測される。なお、「ポックリ」は挿入された促音の働きによって、「ボクリ」より

時間をかけてお辞儀する印象となる。

この2語に対して、「ヒヨコリ」「ピョコリ」はどのようなお辞儀を表しているのだろうか。次項で見していきたい。

3.2 〈ヒヨコ〉系統・〈ピョコ〉系統

〈ヒヨコ〉系統は「ヒヨコリ」「ヒヨッコリ」「ヒヨコン」、〈ピョコ〉系統は「ピョコリ」「ピョッコリ」「ピョコン」「ピョコッ」について以下に用例を挙げる。(引用文中の中略は筆者。以下同じ。)

例15 「どうも有難とう存じました」恐縮しきった丘は、そこでヒヨコリと頭を下げた。

(海野十三「キド効果」S8)

例16 どこからともなく一人の小さな〈中略〉一尺ばかりの人間が出て来ました。そして王子の前にひよっこりと頭を下げました。(豊島与志雄「お月様の唄」T8)

例17 へい、皆様ご苦労様で」ひよこんと一つ頭を下げ、

(国枝史郎「大鵬のゆくえ」T14)

例18 背のすらりとしたハイカラな女が、眼を真円く見開いて立っていた。その威に打たれたわけではないけれど、私はびよこりとお辞儀をした。

(豊島与志雄「白日夢」T12)

例19 六兵衛はこれをきくと、頭をあげてピョッコリとあいさつをして、「はい、はい、ありがとうございます。」と答え、それから勿体ぶって考えこみました。

(下村千秋「とんまの六兵衛」T14)

例20 次郎は、あわてたようにいずまいを正して、びよこんとお辞儀をした。

(下村湖人「次郎物語 第二部」S16)

例21 ちっとも小坊主らしくない軽いちよくな調子でいいながら、ピョコッと次郎吉はお辞儀した。

(正岡容「小説圓朝」S18)

例15～例21に見るように、多くが「頭を下げる」「お辞儀をする」という使われ方をしている。それぞれの語に共起する語を調べたところ、以下ようになった。

〈ヒヨコ〉系統

ヒヨコリ : 頭を下げる4 お辞儀(を)する4

ヒヨッコリ : 頭を下げる2

ヒヨコン : 頭を下げる1

〈ピョコ〉系統

ピョコリ : 頭を下げる14 お辞儀(を)する7 一礼する1

ピョッコリ : あいさつする1

ピョコン : 頭を下げる15 お辞儀(を)する12

ピョコッ : お辞儀をする1

共起語を見ると、ほとんどが「頭を下げる」「お辞儀(を)する」であり、「一礼する」

が「ピョコリ」に1例、「あいさつする」が「ピョッコリ」に1例見られただけである。前項で見たように、「ボクリ」「ポックリ」の場合は「礼をする」「挨拶を送る」等が共起していたことから、お辞儀の仕方が「ボクリ」「ポックリ」とはやや異なるのではないかと推測される。「ボクリ」「ポックリ」が丁寧なお辞儀、腰を曲げた深いお辞儀を表すのに対し、「ヒョコリ」以下〈ヒョコ〉系統・〈ピョコ〉系統のお辞儀は、頭を下げる軽いお辞儀を表すことが多いのではないだろうか。

次に、オノマトペの語形から意味の違いを考えてみよう。「ヒョコリ」「ピョコリ」と「ヒョッコリ」「ピョッコリ」は、語中に挿入された促音によりわずかに語形が異なる。前者と後者を比べると、「ヒョコリ」「ピョコリ」が瞬間的な動きを表すのに対して、「ヒョッコリ」「ピョッコリ」は拍数が3拍から4拍に増えるためか、時間的な長さが感じられる⁸。他の語の例になるが、『現代擬音語擬態語用法辞典』の「こっくり」の語義(1)に「首を縦に一回完全に振る様子を表す」と記述され、さらに解説部分に「『こくり』は(1)でうなづく程度が小さく、スピードも相対的に早い」とある。この記述を参考にすると、「ヒョコリ」「ピョコリ」は、「ヒョッコリ」「ピョッコリ」より、挨拶する程度が小さくスピードが相対的に早い、と考えることができるだろう。たとえば、例18を見ると、ハイカラな女の姿が突然目に入り、とっさに素早く「びよこりとお辞儀をした」という状況を表している。

「ヒョコリ」「ピョコリ」以外の語形を見ると、「ピョコン」は例20に「あわてたように」とあるように、素早く行うお辞儀を表しており、反動で頭が上がるような素早さ⁹が感じられる。また、「ピョコッ」は例21に「軽いちよくな調子」で言った次郎吉のお辞儀として描かれており、気さくに軽くお辞儀する様子を表している。

これらに対して「ピョッコリ」は、例19にあるように「ピョッコリとあいさつをして」と用いられており、「ポックリ」の共起語「挨拶する」と重なっている。「ヒョッコリ」「ピョッコリ」は、「ポックリ」の意味に近く、比較的ゆっくりと挨拶する様子を表しているのではないだろうか。

「ヒョコリ」「ピョコリ」と「ヒョッコリ」「ピョッコリ」の出現語数を先の表2で比べると、「ヒョコリ」「ピョコリ」のほうがはるかに多い。「ヒョッコリ」は2例、「ピョッコリ」は1例だけで、いずれも大正期までの用例しか見られない。調査範囲が影響しているともできるが、調査範囲には多数の作品があり、お辞儀・挨拶をする何種類ものオノマトペが多数見られる中で、「ヒョッコリ」「ピョッコリ」がほとんど用いられていないという事実は、この2語が一般的ではなかったこと、「ヒョコリ」「ピョコリ」「ピョコン」「ピョコッ」という軽い挨拶の方が多く用いられた¹⁰ことの表れであると考えてよいのではないだろうか。

先の表2を見ると、「ヒョコリ」「ピョコリ」「ピョコン」と同様に「ペコリ」が多く用いられていた。「ペコリ」はどのような用いられ方をしたのか、次項で見ていきたい。

3.3 〈ペコ〉系統

「ペコリ」「ペコン」の用例を以下に挙げる。

- 例22 銀行員は一斉にペコリとおじぎをする。 (小熊秀雄「紙幣」S5)
- 例23 まるで伝三郎の妻に謝っているかの様にペこりと頭を下げた。この女は大変いんぎんな態度の女である。 (織田作之助「俗臭」S15)
- 例24 戦時中カシワ手をならして、国民儀礼をやり、電車の中で人の尻越しにペコリと宮城へ頭を下げる、イマドキ直訴するものがある、 (坂口安吾「現代の詐術」S22)
- 例25 どうもお粗末さま」斯う云つてペコンと一つ頭をさげ、いくらかは視えるらしい薄気味わるい眼の、土氣色した顔を自分に向けた。 (葛西善蔵「湖畔手記」S3)
- 例26 巡査は署長の方へ向いてペコンとお辞儀した後、側を向いてもう一つお辞儀をし、廻れ右をして帰っていった。 (海野十三「人間灰」S9)

例22～24に見るように、「ペコリ」は前項で見た「ヒョコリ」「ピョコリ」よりもやや丁寧なお辞儀を表していたと考えられる。例22は銀行員のお辞儀、例23は慇懃な態度の女のお辞儀、例24は天皇のいる宮城¹¹に向かってするお辞儀を表しており、状況を考えてこれらのお辞儀はある程度深いものであると言える。「ペコリ」は、「ヒョコリ」「ピョコリ」のような軽さ、気軽さがないお辞儀も表し得ると言えるだろう。

「ペコリ」「ペコン」の共起語を見ると以下ようになる。

ペコリ：頭を下げる21 お辞儀(を)する9 挨拶する1 腰を曲げる1 うなずく1
 ペコン：頭を下げる8 お辞儀(を)する3

「ペコリ」の共起語には「挨拶する」「腰を曲げる」があり、「ポックリ」「ピョッコリ」と同じくゆっくりとした挨拶を表現する例があることがわかる。なお、「ペコリ」に「じぎお低頭する」と書かれているものがあり、より丁寧なお辞儀を表すように感じられたが、「ピョコリ」に「頭を低げる」と書かれている例があり、現段階では表記を意味に結びつけることはできなかった。

一方、「ペコン」は前項で見た「ヒョコン」「ピョコン」等と同様の使われ方をしている。たとえば例17の「ひよこんと一つ頭をさげ」と、例25の「ペコンと一つ頭をさげ」は非常に似ており、「ペコン」「ヒョコン」「ピョコン」は同様の用いられ方をしていたと推察される。「ペコン」は少数だが、「ペコリ」と並行して用例が見られる。

なお、「ペコリ」と「ペコン」の意味の違いを語形の面から考えこともできる。田守・スコウラップ1999によると、「語基に付加される「り」は「ゆったりした感じ」ないしは「完了」という概念を表す¹²」であり、「ペコン」よりも「ペコリ」のほうがより丁寧なゆっくりとしたお辞儀を表していると考えられることができる。

以上のことから、「ペコリ」は、「ペコン」や「ヒョコン」「ピョコン」「ヒョコリ」「ピョコリ」より丁寧なお辞儀を表し得ることがわかる。先の表2を見ると、「ぽくり」「ぽっ

くり」の用例が見られなくなる大正後期から「ペコリ」の用例が見られるようになってきている。軽いお辞儀を「ヒョコリ」「ピョコリ」「ピョコン」等で表し、より丁寧なお辞儀を「ペコリ」で表していったのではないだろうか。

4 お辞儀を繰り返す場合のオノマトペ

次に、お辞儀を何度も繰り返す様子を表すオノマトペについて見ていく。繰り返すは、オノマトペの語形と関わっており¹³、〈A B A B〉型の「ヒョコヒョコ」「ピョコピョコ」「ペコペコ」がこれに当たる¹⁴。

それぞれの用例を以下に示す。

例27 それは騒ぎでございましてね、はい、はい、はい、」で手を揉み手を揉み、
正面には顔を上げずに、ひよこひよこして言う。(泉鏡花「陽炎座」T2)

例28 誰にでもヒョコ／＼頭を下げ、いざとなれば尻軽に走り廻つた。
(徳富健次郎「みみずのたはごと」T9)

例29 上役にピョコピョコ頭を下げてるような勤人よりか、
(小栗風葉「深川女房」M38)

例30 彼は得意先を丸めこもうとする呉服屋のような意気で、びよこびよこ頭を下
げた。(有島武郎「星座」T11)

例31 店の男がもみ手をしながら、とにかく口の先で流離に雄弁なわび言を言って、
頭をびよこびよこ下げて、(寺田寅彦「三斜晶系」S10)

例32 翁に声をかけらるといきなり飛びたつて帽をとり、「コレはコレは石井さん
ですか、あなたとはまるきり気がつかんで失礼しました。」とペコペコお辞儀を
する。(国木田独步「二老人」M41)

例33 私の前で手をついて、尻つぱり腰をしながらペコペコ頭をさげた。
(中戸川吉二「イボタの虫」T8)

例34 彼は真面目に、ペコペコ頭を下げ、靴を磨くことが阿呆らしくなった。
(黒島傳治「櫛」S2)

例35 憲政会総裁加藤高明の顔さえ見れば議員控室であろうと、廊下であろうと、三
太夫が殿様に接するような物腰で、ペコペコと頭をさげている。
(佐藤垢石「議會見物」S15)

例27～35を見ると、「ヒョコヒョコ」「ピョコピョコ」「ペコペコ」は3語とも頭を下げる動作を繰り返す様子を表している。相手に取り入ったり、非礼を詫びたり、お礼を述べたりする状況で使われ、ほぼ同じ意味を表している。お辞儀を繰り返す動作には丁寧さやお辞儀の深さはあまり反映されないためか、3語に大きな違いは見られない。

なお、用例数には調査範囲の作家による偏りはないと考えられる。例えば夢野久作の作品には、次に示すように3語とも用例が見られる。

例36 福太郎に出合うたんびにヒヨコヒヨコと頭を下げ、抜目なく機嫌を取ろう機嫌をとろうとする素振りを見せ始めたのであった。(夢野久作「斜杭」S7)

例37 同銀行の支配人で井田という大阪弁丸出しの巨漢がこの事務所を訪れて、事務員や私にまでピョコピョコ頭を下げまわったのに対して、

(夢野久作「鉄槌」S4)

例37 父親の区長や村民たちまでもがペコペコと頭を下げ始めた。

(夢野十作「巡査辞職」S10)

例36～例38のオノマトペの使われ方に大きな違いは感じられない。3例は昭和10年前後の用例だが、「ペコペコ」が定着するまで3語が併用されていたのだろう。

先の表2に見るように、「ペコペコ」は明治期から使用例がある。明治期にお辞儀を表した「ポクリ」「ポックリ」に対して、「ポクポク」はお辞儀を表さなかったため、その代わりに「ペコペコ」が用いられていたと類推される。「ペコペコ」は昭和以降、他の語より用例数が多く、お辞儀を繰り返すオノマトペとして定着した様子が窺える。

「ヒヨコヒヨコ」は全体に用例数が少ないが、「ヒヨコリ」が軽いお辞儀に使われたため、それを繰り返す場合に使われたのだろう。「ピョコリ」は明治期にも用例が見られ、それと重なるように「ピョコピョコ」も明治期から用例が見られる。昭和以降は「ペコペコ」が主流となったためか、「ピョコピョコ」の用例も少なくなっている。

5 まとめ

明治期のお辞儀は、ゆっくりと丁寧深くお辞儀するものであったため、お辞儀を表すオノマトペは、体が腰で折れ曲がるような「ポクリ」「ポックリ」が使われていた。時代が下るにつれ、軽く頭を下げるお辞儀が多くなり、「ヒヨコリ」「ピョコリ」「ピョコン」などが使われるようになった。この3語より丁寧なお辞儀を表すことのできる「ペコリ」は、「ポクリ」「ポックリ」と入れ替わるように大正期後半から用例が見られ、昭和以降、徐々に増え、定着していく。一方で「ピョコリ」「ピョコン」も昭和以降、一定数が見られ、軽く素早いお辞儀を表すオノマトペとして使われていると考えられる。

お辞儀を繰り返すオノマトペは、明治期から「ペコペコ」が使われている。同じような意味を表す「ヒヨコヒヨコ」「ピョコピョコ」もあり、「ヒヨコリ」「ピョコリ」と並行して、軽く何度もお辞儀する様子を表してきた。「ヒヨコリ」の用例が少なくなるにつれて「ヒヨコヒヨコ」の用例数も減り、「ペコペコ」が昭和以降に主流となるとともに「ピョコピョコ」の用例数も減った。

以上のような変遷を経て、一般的なお辞儀は「ペコリ」、素早く軽いお辞儀は「ピョコン」または「ペコン」で表し、何度もお辞儀する様子は「ペコペコ」で表すようになった。

今回は調査範囲が狭く用例数が少なかったが、お辞儀のような身近なオノマトペであっても、時代とともに変遷していくことを見ることができた。オノマトペの音と意味の関わりを考える上でも、意味の変遷は興味深いテーマであり、個別のオノマトペ

を取り上げて意味の変遷を辿る意義は大きいと考える。今後は、調査範囲を広げてオノマトペの変遷の様相を検討していきたい。

【注】

- 1 『現代擬音語擬態語用法辞典』の解説に「擬音語・擬態語とは、外界の物音、人間や動物の声、物事の様子や心情を、直接感覚的に表現する言葉である」と定義されている。他の辞典類も同様である。
- 2 例1～3はインターネットの新聞記事検索による。
 - 例1 「読売ONLINE (<http://www.yomiuri.co.jp/?from=ygnav>)」による。連載記事「茂木健一郎のI love脳」の「「旅ラン男」生きる喜びを発見！」の回。
 - 例2 「朝日新聞DIGITAL (http://www.asahi.com/?iref=com_gnavi_top)」のアーカイブによる。朝刊スポーツ面掲載。
 - 例3 「デジタル毎日 (<http://mainichi.jp/search/>)」による。東京夕刊掲載。
- 3 「ペコリ」「ペコペコ」以外に「ピヨコン」「ピヨコリ」もお辞儀の様子を表すことがある。『現代擬音語擬態語用法辞典』の「ぴよこん」の項に「ぴよこんとおじぎをした」という用例が掲載されている。だが、注2に挙げた3つの新聞記事検索で「ピヨコン」「ピヨコリ」「ぴよこん」「ぴよこり」を検索しても「お辞儀する」「挨拶する」という使われ方をしたものは1例もなかった。このことから、現在、挨拶・お辞儀の一般的なオノマトペは「ペコリ」「ペコペコ」であると考えてよいだろう。
- 4 インターネット電子図書館・青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) により、「ポクリ・ポックリ」は2015年2～3月、それ以外は2015年8～9月に調査した。調査対象は、明治から1954年（昭和29年）までの作品である。いずれの語もひらがな表記とカタカナ表記の両表記で調査したが、本稿の本文部分ではカタカナ表記で統一した。なお、用例は青空文庫の記述に従ったため、新仮名遣いと旧仮名遣いの不統一がある。
- 5 「ちよいと頭を下げる」「そつと頭を下げる」等、お辞儀自体を表してはいないオノマトペは除いた。
- 6 拙稿2015「オノマトペにおける音と意味の関連—隣接するオノマトペの意味の重なり—」を参照。
- 7 「ポクリ」は他に「欠ける」「死ぬ」「殴る」等、「ポックリ」は他に「死ぬ」「浮かぶ」「穴が開く」「落ちる」等の意味で使われている。詳細は拙稿2015「オノマトペにおける音と意味の関連—隣接するオノマトペの意味の重なり—」を参照。
- 8 〈Aッブリ〉の語形と意味の関わりについて、一般的には「『ぱっさり』に見られるような、オノマトペに挿入された促音は〈中略〉『強調』を表す」（田守育宏・スコウラップ『オノマトペ—形態と意味—』：p.28）とされる。が、『現代擬音語擬態語用法辞典』の「にこり」の項に「『にっこり』よりも瞬間の印象をとらえた表現」とあるように、〈Aブリ〉と〈Aッブリ〉には時間的な長さの違いが現

れる例があると考えられる。

- 9 『現代擬音語擬態語用法辞典』の「びょこん」の項では、「弾みをつけて一回上下動を行う様子を表す」と解説されている。
- 10 岸田国土「風俗の非道徳性」(昭和15年6月『文藝春秋』第18巻第9号)に、「日本人のお辞儀も、今や千差万別である。素気ないのになると、たゞ頤を突きだすだけといふがある。(中略)長くして搔きあげてゐる髪が前へ落ちて來ないやうに、斜に首を曲げるのがある。片足を後ろへ蹴あげるやうにするのがゐる。千差万別一向に差支へないが、共通の心理は、お辞儀は文字どほり形式だと思つてゐることである。」(青空文庫より引用)とある。昭和になって、丁寧なお辞儀があまり見受けられないという状況をうかがい知ることができる。
- 11 「宮城(きゅうじょう)」は、「皇居の旧称」である。(三省堂『新明解国語辞典』第七版(2013年)の記述による。)
- 12 田守・スコウラップ1999『オノマトペー形態と意味一』p.27の記述。語末の擬音については「大半が擬音語」で「共鳴」を表すという(同p.28)。
- 13 田守・スコウラップ1999『オノマトペー形態と意味一』によると、反復は「音や動作の繰り返さないしは連続を表す」(「第2章 音韻・形態的特徴」pp.29-30)とされる。他の文献においても同様の記述がある。
- 14 〈ボク〉系統にも「ボクボク」という反復形のオノマトペは存在するが、擬音語として靴や馬の足音、木魚の音などを表す例が多い。擬態語としては乾いた土の様子などに用いられ、お辞儀を表す例は見られない。

【引用・参考文献】

- 池上嘉彦1978『意味の世界 現代言語学から視る』日本放送出版協会
- 小野正弘編2007『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
- 寛壽雄・田守育宏1993『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房
- 角岡賢一2007『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版
- 田守育宏・ローレンス＝スコウラップ1999『オノマトペー形態と意味一』くろしお出版
- 中里理子2015「オノマトペにおける音と意味の関連—隣接するオノマトペの意味の重なり—」『表現研究』第102号
- 飛田良文・浅田秀子2003『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 横山駿也2009『明治人の作法 躰と嗜みの教科書』文藝春秋・文春新書
- (白百合女子大学教授)